合同研究会「情報と創造性」第３回開催報告

ネオ・サイバネティクス研究会
情報システム学会基礎情報学研究会

ネオ・サイバネティクス研究会と情報システム学会基礎情報学研究会は、合同で連続研究会「情報と創造性」を開催することになり、２月２７日、第３回研究会をオンラインで開催した。

「情報と創造性」第３回
日時：2021 年 02 月 27 日（土）13 時 00 分～14 時 45 分
場所：オンライン（Zoom を使用）
発表者：中村肇（東京大学）
参加者：２７名

■題名
サイバネティック・パラダイム時代の芸術性と共感性：〈私的なるもの〉に関する身体性の剥奪と美的共有に関する基礎情報学的考察」

■概要
現在，初期サイバネティクスの時代に夢見たフィクション的な世界が現実のものになろうとしている。本発表では，芸術に於ける文学と写真をめぐる身体性の剥奪と美的共有の見地から，デジタル社会の到来がわれわれに与える状況を批判的に考察した。ゼロ年代以降に現れたフィクション・ベースの私小説と，メディア・プラットフォーム上で台頭してきたデジタル時代のテクノ画像＝加工写真を議論の俎上に載せ，其処にあらわれる異質な差異の観察から出発し，その異同が人間と機械のあいだに横たわる思想的かつ社会的な問題を孕むことを確認した。両者はいずれも仮構された現実をベースに成立する極めて現代的な問題を孕んだ情報現象のあらわれであり，心的システム同士の共振が社会システムに影響を与え，相互に干渉し合いながら美的性質を共有し合う性質を保持している。

発表は，第一パートと第二パートに分けて行われた。前者は問題提起を含んだ理論構築編，後者はそうした問題提起に対する質疑応答編である。発表者は，まず第一パートに於いて，文学の創作者に焦点を当て，芸術性と共感性の二つを，共同性／疑似客観性という間-主観的な側面から考察した。具体的には、小説の創作者の心的システムのダイナミクスに関する理論モデルを用いながら，二つのオートポイエーシス同士に「対話」を通じた二人称的なシステムが生じることを示しつつ，そうした「対話」を通じて，三人称的な社会システムに感性が影響を与え得るというボトムアップ型の現実感覚の立ち上がりを，小説と加工写真の両方とを比較しながら検討した。

日本近代文学を特徴付ける私小説，その創始とされる田山花袋の『蒲団』が，自然科学主義にのっとって書かれたものにもかかわらず，それが誤った西欧の客観信仰の受容によって歪曲して受け止められた結果であるという事実は今日では比較的知られているが，そうしたある種の矛盾的な逆説が，我が国に於いて＜私小説＞というものを誕生させ発展させる契機となったのである。「見たままありのまま」に自分の事柄も書かなければならないという「自然主義の制約」は，あたかも客観的世界が前提とされた社会システムから，それを忠実に再現する創作者個人という非対称的な拘束関係が見受けられる。発表者はこれをコンピューティング・パラダイム型の私小説の系譜と呼ぶ。一方で,自然主義に対して異議申し立てを行い当時の文学青年から熱狂的な支持を受けた「白樺派」を,主観から世界を立ち上げるボトムアップ型の私小説としてモデル化した。

質問者からは,芸術性という単語の広さに関する指摘がでた。発表者はそれに対し,J. シュミットの美的慣習の観点から限定化していきたいと答えた。また,共感性とひとくちに言っても,様々なレヴェルでの切り分けができることを,ご指摘頂いた。今後はより具体的な内実に迫って,理論モデルを精緻化して

いきたい。
　昨今では,「芸術」／「美的なるもの」が,デジタル社会のわれわれの身体を取り巻く透明なメディア＝データ主義によって,ますますその美的自律性を剥奪される事態に陥らせている。こうした状況のなかで如何に新しいサイバネティック・パラダイム時代の芸術性,サイバネティクス的な想像力を,其処に実現できるかどうか。それが今後のわれわれの喫緊の課題である。

　なお、本連続研究会は、科学研究費助成事業（研究課題/領域番号：20K12553、研究種目：基盤研究(C)、研究期間：2020～2022 年度）による共同研究「機械と人間との感性および創造性の異同をめぐるネオ・サイバネティクス的研究」の一環として、情報システム学会基礎情報学研究会およびネオ・サイバネティクス研究会の合同で開催された。

（中村　肇　記）